翻　　訳

カール・S・グートケ著

「審判者」か「ランプの油」か？

——伝記の中のシラーの最期のことば——（二）

信　岡　資　生　訳

3

カロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンの『シラーの生涯』（シュトゥットガルトとチュービンゲン　1830）より前に公刊されたものは予め別にして慎重に取り扱うのがよいであろう。というのもそれらはまだ言われたとうりのことばと決めつけるわけにいかなかったからである。それを決めるのはカロリーネの特権なのだ。彼女の叙述は，シラーを「徹頭徹尾理想化する」[38] 傾向があるとは言え，従来知られていたシラー像の細目を修正し，「シラー文学史上最初の頂点」を成すものである。彼女の『シラーの生涯』は，1830年以後シラーの最後のときについてのあらゆる報告の上にいわば黒い影となって覆い被さっている。1830年以前シラーの最期のことばについて耳にした話はむしろ——奇妙なことに偶像化とは反対に——通俗的な方向を向いていて，事実またそれに相応しく伝記作者のコメントもない。例えば1811年匿名でバーゼルとライプチヒで刊行された小冊子『フリードリヒ・フォン・シラーの生涯と彼の優れた著作の評価』は，「彼のミューズの賛美者」に捧げられてはいるものの，しかしミューズの息子自身については，ただ彼が「死ぬ少し前に」このところしばらくその

38）Oellers の書（原注10)），S. 149.

作品を読み耽っていたリヒテンベルクの名を叫んだこと，また「この世を去るしばらく前に」“多くのことが今明るくはっきり見える”と言ったことを聞かされるだけである。[39] 同じようにハインリヒ・デーリング[51]の『フリードリヒ・フォン・シラーの生涯』（ワイマル　1822）の報告でも，伝記作者にとっても一般読者にとってもシラーの退場の台詞についての手がかりは殆どない。そこには以前からよく知られた噂がコメント抜きで伝えられているのみである。「戦争の喧噪」「リヒテンベルク」――あるいはシラーがかねがね訪れてみたいと思っていたザーレ河畔の城「ロイヒテンブルク」[52]か？――それから「ひっそりと大げさな飾りなしに」埋葬して欲しいとの願望――根拠のないワイマルの噂話のあれこれ。

カーライルの『フリードリヒ・シラーの生涯』（ロンドン　1825）はいささか趣きを異にする。この書はゲーテの序文付きでドイツ語版も出た（“Leben Schillers” フランクフルト・アム・マイン　1830）。カーライルはリヒテンベルクもロイヒテンブルクも「意味がない」としてそっけなく払い除ける（283頁以下）。彼はむしろ英国の伝記文学の伝統に則って生のライト・モティーフを奏でる最期のことばを，「死に際し強まる主情」（ポープ[53]）を，生を単に締め括るのではなくこれを総括して有意義にスタイル満点首尾よく完結させる最期のことばを際立たせる。「シラーはいつものように明るく前方を見渡した――永遠に去り行く前に今一度」。いつもの明朗さをもう一度。即ち

シラーのこの最後の果敢な試みには弱まりも衰えも見えなかった。終りが近づくのを悟った彼は，彼に相応しい態度で死に対処しようとした。無頓着を気取るでもなくまた迷い恐れるでもなく，彼の人生行路を特徴づける全く物静かな雄々しさで（！）……だれかが具合はどうかと訊ねたところ，彼は「しだいに平静になっていく」と言った。シンプルだが

39）第4版，Reutlingen 発行年記載なし，S. 180.

含蓄あることばだ。この人の温厚な英雄気質をよく表している。

カーライルが自分にとって唯一決定版のこの最期のことば（彼はなお「多くのことがだんだん明るく明瞭になってきた」をコメントなしで付け加えている——284頁以下）をどこから知ったかは不明であるが，ただこのことばはカロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンが後から発表した「ますます良く，ますます晴れ晴れ」のパラフレーズのように思える。これは既述の通りカーライルの言い回しとぴったり一致するわけではないにせよ，似たような形で既に以前からワイマルで広まっていたものである。はっきりしているのは「しだいに平静になっていく」がカーライルの構想に適っていることである。なぜなら，シラーはカーライルにとってその生き方を示す決定的なことばを残して死ぬ（これは英国の伝記文学が好む形式で今日まで続けられている[40]）ばかりでなく，シラーはまた決して老境に達して死ぬのではない。このことはまさに引用したことばがむしろ喚起するところだが，シラーはむしろ雄々しく，したがって英雄として死ぬ，カーライルがダーヴィニズムの認識と経済的法則の優勢による人間の非人格化，品位の低下の対立像として再三再四同時代人に示したあの類型として死ぬのである。カーライルのシラーは——この意味で——「英雄」であり，最期のことばで自己が英雄であることを示すのである。事実への忠実と想像的視点の間を巧みに泳ぎ抜く伝記のテクニックがここシラーではじめてその真価を発揮する。カーライルが死の場面と結び付けて描く性格像はやはりワイマルの屋階で雄々しく死に行くシラーに完全に相応しいものとなる。われわれには英雄が必要である，とカーライルは言う。何故なら「われわれは純粋で完全でありたいと願う」（293頁）からである。シラーにわれわれはこのような英雄（ヒーロー）を見る——卑俗に汚されることなく彼は自分の人生を歩んだ。世俗の誘惑を彼は傷つくことなく跳ね返した。病気にも彼は冒さ

40） Guthke の書（原注36)）同所。

れなかった。生涯最後の15年間彼は病魔と戦いながら「最も貴い仕事」を成し遂げた。苦痛も彼の自信に満ちた落ち着きを揺さぶることはできなかった。「死に臨んですら彼はしだいに平静になっていった」，心も魂も平常通り高潔さを失わなかった。つまりは相応しい死に方，生と同様に高潔な死をシラーは閉じたのである（305頁）。カーライルはこのように延々と述べ立てる。カロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンがこれを読んだら満足したかもしれない。ただし死の場面はちっとも事実に合っていなかったが。

カーライルの著述のドイツ語訳が刊行された同じ年に，カロリーネは『シラーの生涯　家族の思い出とシラー自身の手紙と友人ケルナー[54]の報告から』の中でさまざまな事実関係の誤りを一掃したが，彼女には伝記術的興味はいささかもなかった。彼女にとっての関心は，事実はどうであったかを確認しておくこと，つまりは事後（ポスト ファクトゥム）の世代である。だからカロリーネは最期のことばを殊更に意味ありげに，あるいは生涯を象徴するもののように際立たせて紹介してはいない。むしろ彼女は，最期のことばに関して（イン プンクトー）はアクセントを置くことなく事実経過を語る。彼女の報告はその後何度も繰り返して引用されパラフレーズされるので，ここでひとまず詳細（イン エクステンソー）に記しておくことにする。

私が７日の晩彼の許へ行くと，彼はいつものように悲劇の素材について，人間が内部に潜めた崇高な力を呼び覚まさずにはおかない方法について話を始めようとしたが，私は彼を興奮させたくなかったのでいつもと違い気乗りのしない受け答えをした。するとそのことを感じた彼はこう言った。「だれももうぼくのことをわかってくれなくて，ぼくももう自分自身がわからなくなったのなら，むしろ黙っているしかない」。彼はそれからすぐ眠り込んだが，さかんに寝言を言った。「これがおまえたちの地獄か，これがおまえたちの天国か？」と叫んで彼は目を覚ました。それから彼は穏やかに微笑んで上方を見上げた。まるで何か慰めに

なるようなものが出現したかのようであった。彼はスープを少し食べ，私がさよならを言うと，私に向かって「今夜は神の思し召しがあればぐっすり眠れそうだ」と言った。

8日の朝は彼はまずまずの調子で過ごした。静かにしばしばまどろんだ。晩方に私が来てベットへ歩み寄り，気分はどう？と尋ねると，彼は私の手を握り「ますます良く，ますます晴れ晴れとしてくる」と言った。これは自分の心の状態について言っているのだと私は感じた。これが彼のいとしい唇から聞き取れた私に向けた最後のことばとなった。彼はカーテンを開けるようにと望んだ，陽光が見たいと。明るい眼差しで彼は美しい夕陽の日差しを見つめ，自然も彼の別れの挨拶を受け入れた。彼は子供たちにはめったに会いたがらなかったが，8日の朝連れて来た末娘[55]を嬉しそうに満足げにしげしげと見つめた。夜な夜な彼に付き添って過ごした忠実な召使の言うところによると，彼はよくしゃべった，たいていはデメートリウスのことで，その場面を朗詠した，何度か彼は神を呼び出し，のろのろと死なせないよう頼んだそうである。神はその願いを聞き入れた。9日の早朝彼は意識不明に陥った。彼は支離滅裂なことばばかりを話した。たいていはラテン語であった。

医者[56]に指示された入浴を彼はしぶる様子であったが，しかしひとが自分のために世話をしてくれることにはすべて身を委ねて我慢した。医者はだんだん衰えてゆく体力を掻き立てるためにシャンパンをグラス一杯飲ませる必要があると判断した。それが彼の末期の水となった。胸の圧窄はさほど苦痛ではないように見えた。彼はその痛みに襲われて枕の上へ仰向けに倒れては周囲を見回したが，もう私たちを見分けることはできないようであった……

3時頃完璧なまでの衰弱がやってきた。呼吸が詰まり始めた。妹[57]はベットの傍にひざまづいた。「私の手を握ったわ」と彼女が言った。私は医者と寝床の足下に立ち，温めたクッションを冷たくなってゆく彼の

足にかけてあげた。電気のショックのようなものが彼の顔面を走った。それから頭ががっくりと垂れ，容貌がすっかり穏やかになって輝いた。顔の表情は安らかに眠る人のものとなった。（Ⅱ巻 275–279頁）

彼女のこの記述はそれ以来伝記文学の中で幾度となく繰り返された。しかしだからと言って出所の疑わしい最期のことば，戦闘妄想や「リヒテンベルク」ないし「ロイヒテンブルク」が直ちに失せてしまうことにはならなかった。特にはじめのうちはそうであった。例えばカール・ホフマイスター[58]（1842）やグスタフ・シュヴァープ[59]（1840）では，それらがまだ何のためらいもなくカロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンの報告することばと結び合わされている。[41] 彼女の決定的な報告の存在は1830年以降もなお，フォス（彼は臨終の場に居合わせなかった）が伝えるナフサを欲しがったという話とか，あるいは，これまたフォスの報告によるのだが，最後の力を振り絞って何か書こうとしたとかいう話が，コメントなしで書き添えられるのを妨げている。例えばホフマイスターやシュヴァープだけでなく，さらにベルガー[60]（1909）やコンラディ＝ブライプトロイ（1986）[42]でさえそうである。どこから引いてくるのか少なからぬ本で，例えばエーミール・パレスケ[61]やヨハネス・シェル[62]の伝記[43]でもまだシャルロッテへのキスの話が出てくる。それなのに底本とされているのはカロリーネの報告なのだ。最後の日没，最後の入浴，最後のシャンパン，それから子供が泣き叫ぶ家族の情景，そこからすぐ検視と埋葬に話が移ってゆく。これらのことがやがてお定まりの話に固まってしまう。しかも何よりもコメントなしでだ。ゲーテの死を強く思わせるカーテンを開けてくれとの願いに

41) Hoffmeister の書（原注27)）同所。Gustav Schwab, Schiller's Leben, Stuttgart ²1859, S. 624–627（初出は1840）。
42) Karl Berger, Schiller. Sein Leben und seine Werke, München1909, Bd. II, S. 774f.; Ellen Conradi–Bleibtreu, Die Schillers, Münster1986, S. 195.
43) Palleske の書（原注22)），S. 603; Johannes Scherr, Schiller und seine Zeit, Leipzig 1859, S. 608.

すらコメントがない。現代は実証主義の時代である。このことは今始まったシラーの最期のことばの源を吟味するという些細な事柄にもはっきり現われる。[44] いずれにしても——とにかく20世紀の中に深く入ってまでもだが——カロリーネの報告のスタイルの木霊(こだま)が到る所で聞こえてくる。彼女の報告は，ラインハルト・ブーフヴァルト[63] (1937) やフリードリヒ・ブルシェル[64] (1968) が通俗的になってしまった彼らのシラー伝の中でやっているように[45]，そのままそっくり全部転載されずに周期的にパラフレーズされているが。コメントではせいぜい炯眼の認識が示されたり，例えばシラーが熱にうなされてしゃべった支離滅裂なラテン語は「かつて彼がアカデミーで行なう羽目になった講演の切れ端であることは明らか」[46]だと請け合ったりされているが，後者は瀕死の人間の，または少なくとも縊死者や溺死者の「パノラマヴィジョン」[65] についての素人くさい情報から出たものであるのは明らかである。

実証主義の理念に馬鹿正直に忠実な伝記作者たちによってカロリーネの伝える資料がこのように空想豊かに粉飾を施されてゆくしだいはいっそうおもしろく，例えばハインリヒ・デュンツァー[66]——エーリヒ・シュミッ

44) Palleske，同所，S. 605；Schwab の書（原注41)），S. 625.

45) Reinhard Buchwald, Schiller, Wiesbaden 1959, S. 802 以下（初出は1937）；Friedrich Burschell, Schiller, Reinbek 1968, S. 540 以下；同著者，Friedrich Schiller in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, Hamburg 1978, S. 166 以下(初出は1958)。コメントなしのパラフレーズは：Heinrich Viehoff, Schiller's Leben, Geistesentwicklung und Werke, Bd. III, Stuttgart 1875, S. 256；Scherr の書（原注43)），S. 608；James Sime, Schiller, Philadelphia [1882], S. 213；Jakob Wychgram, Schiller, Bielefeld und Leipzig 1895, S. 517；Ludwig Bellermann, Schiller, Leipzig, Berlin und Wien 1901, S. 248 以下；Eugen Kühnemann, Schiller, München 1905, S. 599 以下，Margaret von Seydewitz, Schiller, Cambridge 1937, S. 52 以下；Christoph Wetzel, Friedrich Schiller, Salzburg 1979, S. 65；Hansjoachim Kiene, Schillers Lotte, Düsseldorf 1984, S. 286 以下。以下で触れる最期のことばに注釈を付けている伝記も言うまでもなくカロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンに依っている。

46) Lily Hohenstein, Schiller, Berlin 1955, S. 338. Peter Lahnstein, Schillers Leben, München 1981, S. 459 を参照。

ト[67]はドイツ文学についての彼の注釈は殆ど公共に有害と言えると断定したそうだが――彼は「これがおまえたちの地獄か？　これがおまえたちの天国か？」については全く深層心理学抜きで次のような報告をやってのける。「シラーは自分がみんなから宗教上の勧告を受ける夢を見たのだ」と。また「ますます晴れ晴れ」については，「快い映像が衰弱した病人の魂の回りに漂った」。そのあと「高貴な心臓が永遠に停止する」前にシラーはシャルロッテになお「神々しい愛情を籠めて微笑みかけた」と。[47]　デュンツァーのトレードマークであるこの上なく即物的な実証主義にもかかわらず，ここではすでにシラーは，カロリーネの報告に従えばもはや世俗の人ではなく，また世俗の人であったこともなかった――彼もまた特に最期のことばによって古典的巨匠の一人に昇格するのである。

この点は，カロリーネが淡々として伝えた事実を自分なりに解釈してみたいという衝動が時が経つうちには抑え切れなくなることの現われかもしれない。とにかく最期の吐息の解釈者たちにとっての問題は，例えばオットー・ハルナック[68]が『シラー』（ベルリン　1898）を書いたときの気持と全く同じで，つまりハルナックはシラーの最期の台詞，即ち『デメートリウス』のマルファ[69]のモノロークを単に引用するだけですますのではなく，世間でよく行なわれているように最期のことばを神秘化することで，これを「臨終の床に至るまでこの詩人の生涯を満たしたすべての理念的憧憬の最後の集約的表現」（329頁）としてわれわれへの遺産としたい，という誘惑にどうしても逆らい切れないのである。これを喜ぶ読者はおおぜいいることだろうが。

カロリーネが報告する最期のことばの中のどれが，終結した生涯のサインと解釈されるものに選ばれるかはやはり興味深い。ここでもまた先頭を切るのは豊富な伝統に根を下ろした英国の伝記文学である。ヘンリー・W・ネヴィンソン[70]は『フリードリヒ・シラーの生涯』（ロンドン　1889）

47）Heinrich Düntzer, Schillers Leben, Leipzig 1881, S. 537–539.

の中で，カーテンを開けてくれとの頼みは「おそらく彼が意識あるうちに話した最後のことばであった」と強調し，そのあとすぐ「彼の最後の要請はゲーテと同じ光であった」と続ける（185頁以下）。1931年の彼のゲーテ伝ではもっとはっきり「仲の良かった二人は死の点でも互いに似ていた」[48]と言い切る。まるで文壇の立役者二人が協力して共同の記念碑を設計したかのようだ。二十数年を飛び越え仲良く共鳴し感応し合って。これもまたドイツ古典主義が行なった神話への貢献というわけだ。ネヴィンソンによれば，シラーにとってもゲーテと同様，臨終の床での光の要求は全生涯を括るに相応しい封印である。しかしながらここで先のカーライルの場合と同様，死のシーンに結び付けられている全体的な性格付けについておもしろいのは，物静かな落着き（カーライルのいう平静（カーム））が強調されていない点である。むしろその反対に（そしてこれがいかにも彼らしい英国流なのだが）ネヴィンソンは次のように言う。「彼は開けっ広げの恐れ知らずとか，全く健全（ヘルシー）で活動的（アクティヴ）な性質の平静（カーム）とかの境地には決して到達しなかった」，シラーの習癖はスポーツマンのというよりもむしろ無精者のそれである（188頁），だがそれにもかかわらず彼の本質に決定的な特色を付与しているもの，即ち彼の「快活さ（チアフルネス）」が最期の瞬間に最後の願いとなって表われた，「暗がり（グルーム）」は，最後になお太陽の光を見たいと望むような人間には無縁のものである（191頁），と。ここでネヴィンソンが行なっている説明はいささかアクロバティックであるが，従来から最期のことばの回りに漂っている意義のオーラに立ち帰っているだけの話である。ここでもまた思考形式は「生きてきたままに死んでゆく」である。生のメロディーが完成としての死においてもう一度聞こえてくるのだ。別の伝記[49]に書かれているように「シラーは勝者として死んだ」のである。

---

48) Henry W. Nevinson, Goethe : Man and Poet, London 1931, S. 253.
49) Alexander von Gleichen–Rußwurm, Schiller. Die Geschichte seines Lebens, Stuttgart 1913, S. 531. 思考形式については原注36)を参照。

ただ困ったことにこの公式には実にさまざまな内容を盛り込むことが可能なのである。例えばリリー・ホーエンシュタイン[71]は，シラーが死ぬ二，三日前にカロリーネと交わした悲劇の素材についての会話の報告に感傷的なコメントを付け加えなければならないと思った。「最後の吐息に至るまで彼は使命を尽くさずにはおれない！」(338頁)。アレクサンダー・アーブッシュ[72]の『シラー　あるドイツの天才の偉大と悲劇』(ベルリン1955) のようなシラーの最後の時間について努めて客観的に記した報告の中ですら――因にこの書は，カロリーネのブルジョア的感傷に満ちた言動は共産主義者である著者の好みに合わなかったものと見えて，彼女の関与を殆ど無視するほどデテールを省略しているが――生の一貫性の名のもとに最期のことばの賛美がなされている。それもここではフォスが伝えたナフサの要求を取り上げて。「生きてきたままに死ぬ」の公式に従う解釈にのめり込んだアーブッシュは，ナフサが疑いもなく薬であると分かっている[50]ことを無視するだけではない。炯眼のアーブッシュには，そればかりか何のために彼の言うランプの油が必要だったかも分かる。「最期のことばで彼はまだ書こうとして『ナフサ』を欲しがったのであった」。だからこそこの伝記作者は，シラーが亡くなったベッドが書きもの机から『二歩と』離れていないところにあったことを何よりも大きく取り上げているのである（僅か10行の中でこの同じことばが二度使われている）と私には思えるのである。

最後に『審判者（ユーデクス）』を取り上げよう。このことばをベノー・フォン・ヴィーゼは大いに重んじたものである。このことばがシラーの伝記に浮上してきたのは，先にも述べたように1905年に初めて公表されてのち，1909年カール・ベルガーの『シラー』(Ⅱ巻，745頁) が最初である。しかしながらベルガーでも，他のすべての義務的に報告される最期のことばと同様やはりコメントは付いてないが，ただ他の点では大変客観的なこの実証主義者

50)　原注24)を参照。

ベルガーは，シラーがこのことばを「浄福のまなざし」をして言ったと報告している。これは証人カロリーネが語る「気高く」上を見上げてとは同じでない。ホーエンシュタイン（1955）もこの最期の時の発言に基底のメロディーないし首尾一貫して完結した生の総計（ズマ ズマールム）を見て取っている。「またしても，そして今なお，消えゆく生を満たすのは使命と責任と釈明の幻影である」(338頁)。J・L・スネトラーゲは1962年これに付け加えて，まるでシラーは己の生について弁明せんとするかのようだ，と言っている。[51] ベルント・フォン・ハイゼラー[73]は悲壮な調子で「己の裁判官への呼びかけで道は完結する」と迫真の意気込みを見せる。つまりここでもまた『審判者（ユーデクス）』は数多あるシラーの最期のことばの中でも最も意味深いものとなるのであるが，しかしもはや単に意味深い完結としてのみ捉えられるのではなく，それ以上に，物質主義に溺れて「精神的責任」から逃れている読者世代[52]が傾聴すべきアピールとして捉えられるのである。これに対しH・B・ガーランド[74]は，『審判者（ユーデクス）』を手がかりにして自身いささか裁判官を気取ってシラーに良い評点を与えてやっている。もしもそこにこれほど多分にアングロサクソン流のスポーツ精神が籠められていなかったとしたら，アカデミックなペダントリーだとして冷い目で見られるところであろう。「50歳はあまりにも困難なゴールであった。悲劇は，ああ，未完に終わった。しかし彼は善戦した」。[53] これがこのシラー伝の結びとなっている。

最期のことばのこうした使用は，ベノー・フォン・ヴィーゼの手練に比べればまだしも罪が軽いように見える。ヴィーゼは最期のことば『審判者（ユーデクス）』を手がかりにして全編を貫く問題を立て，そうすることでこの伝記の主題を転調させたパターンで，再度と言おうか初めてと言おうか，完全に明る

51) J. L. Snethlage, Schiller, Den Haag 1962, S. 149.
52) Bernt von Heiseler, Schiller, Gütersloh 1959, S. 218 以下。
53) H. B. Garland, Schiller, London 1949, S. 260.

みに出す。この手法により（193頁参照）伝記は「宣誓した芸術家（アーティスト フー イズ オン オアス）」[75]の業績としての実を示すことになる。事実を変えたり，ずらしたり，的はずれな光に曝したりすることなく，この伝記作者は事実を同時にうまく利用して叙述する。その技法ないし手管は，文学でフィクションの意味でお馴染みの手法と同類のものである。[54] そのできそこない（マルフォーメーション）も，例えばガーランドやフォン・ハイゼラーのように，それなりにまたあの思考形式，構成形式をうまく使って創作する可能性を示している。

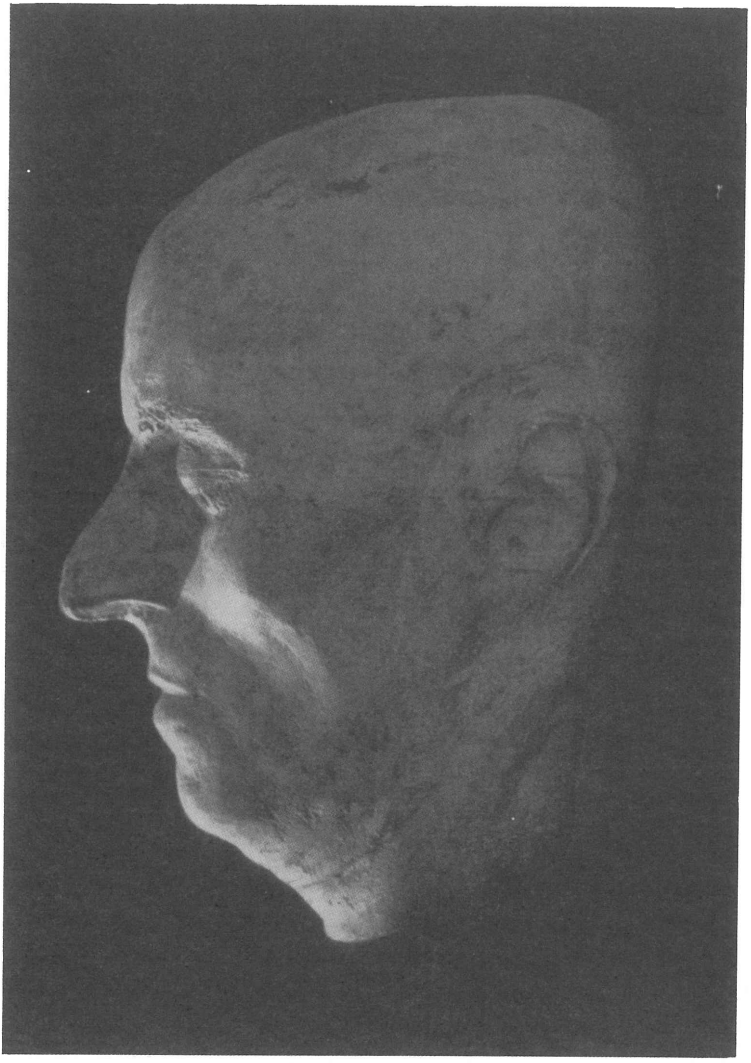
簡単に言えば「生きてきたままに死んでゆく」がこうした手法の根本方式である。それは伝記では聖人伝説以来すっかりお馴染みとなっているものである。その応用の優れた今日の達人はA・N・ウィルソン[76]である（『トルストイ』1988）。同時に，また何よりもそれは西欧文化のみならず，他の多くの文化の中で長い歴史を持つ思考形式であって，その顕現は公的私的生活を問わず，もちろんまた文学にも広く存在する。最期のことばには畏敬の念が払われる。ゲーテのワイマルでも南太平洋[77]でも。最期のことばは世代から世代へと畏敬の念を籠めて伝えられ，生き延びて人々に感銘を与え続ける。ボートー・シュトラウス[78]が「一人の人間が最期に言ったことばの絶大な力」[55] と言うのもあながち誇張ではない。シェークスピアの『リチャード二世』の次の台詞はあまりにも有名である。

おお，だが，死にゆく者のことばは，荘厳な音楽のように
人の耳を傾けさせずにおかぬ，と言うではないか
……
人の臨終はそれまでの全生活よりも注目を浴びるものだ　（第Ⅱ幕　第1場）

54）総じて Ira Bruce Nadel, Biography : Fiction, Fact and Form, New York 1984 を参照。原注36）を参照。
55）Botho Strauß, Paare, Passanten, München 1981, S. 55.

ヴァルター・ベンヤミーン[79]はよく引用されるエッセー『物語作者』の中で，臨終に際しはじめて人間の生は「伝承に値する形式」を得，そうして「極悪人といえども死に臨んでは周囲の生きる人々に対する権威」[56]を持つと記した。最期のことば（因にこの語はアメリカ議会図書館の分類システムの中では独立の項目となっている）はこうした思考の脈絡の中で文化遺産的性格を帯びてきている。それは幾百年，幾千年を経ても想起される——ローマの皇帝たち[80]，旧約聖書の予言者たち[81]，キリスト教の殉教者たち[82]，アイスランドの英雄伝説の主人公たち[83]，フランス革命の立役者たち[84]の人口に膾炙した名言を思い起こすがよい。文化を持つとは記憶を持つことを意味するとすれば，伝承された最期のことばこそ文化の真髄である。これに著名な人物たちの死以来ひとかたならず貢献してきたのが伝記である。伝記は過去の生を記憶の中で永遠にする。とりわけこれを最後としてそのあとにもはや続くものがないことばによって。

56) Walter Benjamin, Schriften, Bd. II. 2, Frankfurt am Main 1977, S. 449 以下。



Ludwig Klauer の手によるシラーのデスマスク
(Schiller. Bilder aus seinem Leben. Stuttgart, 1963より)

訳　注

51 Heinrich Doering, 1789–1862. ドイツの作家，伝記作者。ゲーテの最初の伝記作者（Goethes Leben. 1828）として知られる。

52 Leuchtenburg. 北バイエルンで現在最も良く保存されて残っていると言われている城跡。建造は1124年に遡る方伯の居城で，1634年スウェーデン軍との戦闘で破壊され，さらに1842年には火災も発生したが，1888年再建されて今日では眺望の良さを誇る観光名所となっている。三十年戦争史を書いたシラーがこの城に興味を持ったのも不思議ではない。ただしこの城の位置はナープ河畔（an der Naab）であってザーレ河畔（an der Saale；念のために言えば an der Saar ではい）ではない。著者の記憶違いと思われる。

53 Alexander Pope, 1688–1744. 英国古典主義文学の代表的詩人。“ruling passion strong in death” は『コベム卿への書簡』（“Epistle to Lord Cobham”, 1733）の中のことば。

54 Christian Gottfried Körner, 1756–1831. シラーの若いときからの友人でシラー崇拝者。ドレースデンに住む枢密顧問官で，シラーの最初の伝記（シラー全集12巻　1812–15　の序）を書いた。

55 シラーとシャルロッテ夫人の間には4人の子供がいた。長男 Carl Friedrich Ludwig 1793–1857, 次男 Ernst Friedrich Wilhelm 1796–1841, 長女 Caroline Henriette Luise 1799–1850, 次女 Emilie Henriette Luise 1804–1873 である。末娘（次女）のエミーリエは1804年7月25日の生まれであったから，このときはまだやっと満1年6ケ月であった。

56 ワイマルの宮廷医 Wilhelm Ernst Christian Huschke (1760–1828)。彼の報告によれば，1805年5月1日夕にシラーは発病，左胸部に痛みを訴え，ひどく咳込み発熱したという。5月6日の病状は痰がうまく出ず，脈も弱まったので，フシュケは胸に発泡膏を貼り，入浴を指示した。5月9日午前11時にも入浴を指示している（Schillers Werke, Nationalausgabe 24 Bd. Schillers Gespräche. S. 428, 430, 434 による）。シラーは以前から持病の疝痛（Colik）に悩んでいたが，死亡の近因は肺炎と見られている。

57 シラー夫人シャルロッテのこと。

58 Karl Hoffmeister, 1796–1844. ドイツの文学史家，教育学者。ケルンの Friedrich–Wilhelm–Gymnasium の校長で，5巻の大著 “Schiller's Leben, Geistesentwicklung und Werke im Zusammenhange.” (1832–42) によって高名を馳せた。

59 Gustav Benjamin Schwab, 1792–1850. ドイツの詩人，学者でジャーナリスト。ゲーテやロマン派の詩人たちと交流があった。古代からの伝説や民間

説話の編者として知られる。

60 Karl Berger, 1861–1933. ギーセン大学名誉教授。ドイツ文学・文化史の研究家で，シラーの伝記作家として名高い。

61 Emil Palleske, 1823–1880. ドイツの作家。最初俳優を志したが，のちドラマの朗読者に転向して高名を馳せ，傍ら執筆活動も行なった。

62 Johannes Scherr, 1817–1886. チューリヒ大学の歴史学教授で，文学史研究の傍ら郷土（シラーの故郷でもある）ヴュルテンベルク州の歴史や，ここを舞台にした詩や物語・小説を書いた。

63 Reinhard Buchwald, 1884–1983. ドイツの文学研究家，ハイデルベルク大学教授でドイツ古典主義を専門分野とした。

64 Friedrich Burschell, 1889–1970. ドイツの著述家。自分の著書をナチスに焼かれて1933年にチェコスロヴァキアへ亡命，そこでトーマス・マン協会を設立した。1954年にドイツへ帰国した。

65 瀕死の人，特に溺死者や縊死者の脳裏には最期の瞬間にその一生がもう一度閃いて回顧されるという想像ないし言い伝えについては，フランスの哲学者アンリ・ベルグソンも関心を寄せたし，いくつかの文学作品にも影響を与えている。詳細については『往生際の名台詞』第2章3（78–79頁）参照。

66 Heinrich Düntzer, 1813–1901. ケルンの人でドイツの文学史家。ゲーテ，シラー，レッシングの伝記を著わした。

67 Erich Schmidt, 1853–1913. ドイツの文学史家。ストラスブール，ヴィーン，ベルリン大学教授を歴任。1885年からワイマルのゲーテ・アルヒーフの館長を務めたこともある。

68 Otto Harnack, 1857–1914. ドイツの文学史家。ダルムシュタット工業大学，シュトゥットガルト工業大学教授を歴任，ゲーテの研究者として名を挙げたが，自殺で生涯を終えた。

69 Marfa. ロシアの先帝イヴァン四世の5人の妃の1人でドミートリ王子の母。ある僧院に幽閉されて不遇な半生を送る。孤児であったデメートリウスが，自分がドミートリであると信じて蜂起したとき，現皇帝ボリスの使者からデメートリウスの素性の欺瞞を証言するよう頼まれるが，ボリスの専横を憎んでいた彼女はこれを拒否する。のち，ドミートリがすでに暗殺されていたことが明るみに出ると，今度は逆にデメートリウスから，彼の出生について偽証を強要される。

70 Henry Woodd Nevinson, 1856–1941. 英国の新聞記者でエッセイスト。

71 Lily Hohenstein, 1896年生まれのドイツの女流作家。ゲーテ，シラー，クライストに取材した短編小説を書いた。

72 Alexander Abusch, 1902–1982. ドイツのジャーナリト，のち政治家。ナチス時代にメキシコに亡命，ヒトラー政権崩壊後東ドイツに帰り，SED（ドイツ社会主義統一党）の幹部として活躍，1958–61年には東ドイツの文化相を務めた。

73 Bernt von Heiseler, 1907–1969. ドイツの詩人，劇作家。プロテスタントの立場からドイツ国民をニヒリズムから救い出すことを詩人としての自己の使命としていた。

74 Henry Burnand Garland，1907年生まれの英国のエクセター大学の独文学教授。シラーの研究者で，ゲーテメダルを受けた（1975年）こともある。

75 『経済研究』第137号130頁参照。

76 Andrew N. Wilson，1950年生まれの英国の作家。1988年に著わしたトルストイの伝記では，トルストイの臨終のことば「農民はどのように死ぬのだろうか？」を，農民貴族としてのトルストイのライト・モチーフ，ライフメロディーとして全編に貫き流している。

77 アメリカの小説家 Herman Melville (1819–1891) の海洋小説 "Moby Dick" (1951)『白鯨』の中に最期のことばのミステリーについて述べた箇所がある。

78 Botho Strauß，1944年生まれのドイツの著述家。1980年代以降ドイツ文学界で最も注目を浴びている作家の一人で，繁栄する社会の中での人間関係の悲惨を小説やドラマに描いている。

79 Walter Benjamin, 1892–1940. ドイツの批評家。評論やエッセイで現代社会を鋭く分析して批判的なメスを入れ，反ファシズム闘争の思想的中核となっていったが，ナチスに追われてパリに亡命，さらにスペインへ逃げる途中で自殺した。

80 例えばヴェスパシアヌス帝 (Titus Flavius Vespasiānus, 在位：70–79) の最期のことばは「王者は立ったまま死ぬべきだ」と「予はいま神になりかけている」の二説あり，また自殺した暴君ネロ（Claudius Caesar Augustus Germanicus Nero, 在位：54–68）の最期のことばは「予が死ねば世界はなんという芸術家を失うことか」。

81 例えば旧約聖書の創世記第四九の中にはヤコブの死の床での予言がある。

82 例えばチェコの宗教改革者で火刑に処せられたフス (Jan Hus, 1371–1415) は，自分の前に積まれた薪の山にさらに1本の薪を押し加えた老婆（あるいは農夫）に向かって「何という無知！」と言ったという。またスイスの宗教改革者で，カッペルの戦闘で死んだツヴィングリー (Ulrich Zwingli, 1484–1531) の最期のことばは「汝らは肉体を殺すことはできても魂を殺すことは

はできない」。あるいはまたイタリアの哲学者ジョルダーノ・ブルーノ (Giordano Bruno, 1548?–1600) の最期のことば「私は殉教者として喜んで死ぬ。私の魂は煙と共に天国へ昇るであろう」など。

83 12世紀から13世紀にかけて成立したアイスランドの国民文学の『サガ』に登場する戦士の一人は，槍で刺されて「幅の広い槍だ，流行することであろう」と言って倒れる。

84 例えばマリー・アントワネットはギロチンへの階段を上る際に誤って死刑執行人の足を踏み，「ごめんなさい，わざとしたことではありませんの」と言った。ダントンは死刑執行官に向かって自分の頭を指差しながら「これを民衆に見せてやって損はない。“共和国万歳！”と彼らは叫ぶだろう。やがて共和国は頭がなくなるのも知らずに」と言った。アルマン・ルイ・ド・ゴント＝ビロン将軍 (Armand Louis de Gontaut, Duc de Biron, 1747–1793) は，刑吏にワインの入ったグラスを差し出して「まあ一杯やれ，きみの仕事を果たすには勇気を出さなくては」と言った，など。